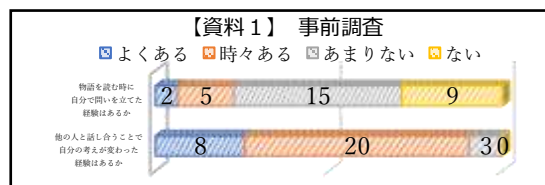


18	豊田	益富中学校	オギタ ケイスケ 氏名 荻田 啓介
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

対話と問いを往還しながら学びを深め、作品の価値を自らの言葉で紡ぎ出す生徒の育成
— 中学3年 物語文「故郷」の実践を通して —

I 主題設定の理由

OECD ラーニング・コンパス 2030 では、自ら学びを方向付ける「Student Agency（生徒エージェンシー）」、他者との協働を通して新たな価値を創造する「Co-agency（協働的エージェンシー）」、そして学びを振り返りながら更新する「Reflection（省察）」が重視されている。国語科の文学的文章の学習においても、生徒が仲間との対話を通して考えを広げたり深めたりしながら、作品の価値や主題を自らの言葉で表現していくことが求められる。



本学級の生徒に「対話を通して自分の考えが変わった経験があるか」と尋ねたところ、80%以上の生徒が肯定的に回答した【資料1】。このことから、生徒は対話を通して考えを広げたり深めたりする素地を備えていることが分かった。一方で、物語文「握手」の学習後の振り返りでは、出来事や登場人物の心情に関する記述は見られるものの、作品の価値や主題に迫る記述は少なく、対話が十分に読みの深まりにつながっていない実態が見られた。

そこで本研究では、対話で生まれた疑問や気付き、考えの変容から問いを生成し、その問いを手掛かりに本文へ立ち返るといった以下の①～③の学習を繰り返しながら作品の価値や主題に迫る学習を構想した。

- ①仲間との考えのずれや新たな視点を得るために、教師による焦点化されたテーマについて対話をし、「対話ノート」という記録用紙を用いて、自分や仲間の考えを整理する。
- ②対話から得た気付きや考えの変容を SKYMENU の発表ノートで作成した「問いノート」に記録し、新たな問いを生成する。
- ③問いを基に本文を再度読み深めていく。

これらの学習過程を通して、生徒が単元末に自分の深めたい問いを創出し、作品の価値や主題について自らの言葉で紡ぎ出すことを目指し、本研究の主題を次のように設定した。

対話と問いを往還しながら学びを深め、作品の価値を自らの言葉で紡ぎ出す生徒の育成
— 中学3年 物語文「故郷」の実践を通して —

II 研究の概要

1 目指す生徒像

対話から問いを生み出し、読みを深めながら、作品の価値や主題を自分の言葉で表現できる生徒

2 研究の仮説と手立て

<仮説1>

問い生成の基礎・基本を学ぶ場を設定するとともに、教師が焦点化したテーマによる対話の中で生まれた気付きや疑問、考えの変容を問いノートに記録する活動を位置付けることで、問いを生成する視点を理解したうえで、対話から問いを生成することができるだろう。

【手立てア 教師のモデルによる問い生成の基礎基本を学ぶ場面の設定】

問いを生成する視点を理解し、自分の気付きや疑問を問いとして表現できるようにするために、見通す段階において、「気付きから問いが生まれるまで」の思考過程のモデルを示す。

【手立てイ 問いノートを活用した問い生成への支援】

対話を通して問いを生成できるようにするために、教師が焦点化したテーマによる対話の中で生まれた気付きや疑問、仲間との考えのずれを問いノートに整理・記録する活動を位置付ける。

<仮説 2>

対話と問い生成との往還を繰り返す学習過程を設定し、単元末に「自分が一番深めたい問い」を位置付けることで、問いや考えを蓄積、更新しながら読みを深め、作品の価値や主題について自分の言葉で表現することができるだろう。

【手立てウ 対話と問い生成との往還を促す学習サイクルの設定】

対話を通して問いや考えを更新しながら読みを深めることができるようにするために、対話によって生まれた気付きから問いノートを作成し、再び焦点化されたテーマで対話を行う活動を複数回繰り返す中で、問いや考えを更新できる学習サイクルを設定する。

【手立てエ 対話と問いの蓄積を生かした問いの精選】

自分の深めたい問いを創出し、作品の価値や主題について自分の言葉で表現することができるようにするために、対話における自他の考えを記録した「対話ノート」や対話の気付きや自分の問いを整理した「問いノート」を単元末に振り返りながら「自分が一番深めたい問い」を考察する場を位置付ける。

3 抽出生徒について

	生徒の実態	期待する姿
A	基礎的な読解力は十分にあるが、自分から問いを立てて読む経験が少なく、読みが受け身になりがちである。対話では仲間の意見をよく聞かすが、自分の考えを広げたり問いを更新したりすることが苦手である。	本文表現を起点に問いを立て、仲間との対話を通じて問いを更新しながら考えを深めていくことで、作品の主題を自分の言葉で表現できる姿を目指す。

4 単元構想（8 時間）

過程	手立て	学習課題 / 学習内容 / 予想される生徒の思考	◎教師支援・○指導の工夫
見通す	ア	1 『故郷』冒頭を読み、問いを立てよう（1 時間） ①「問いを立てる」方法を学ぶ。 ②問いノート（導入）「冒頭部分を読み、気づいた点を中心に問いを立てる」 →故郷はこんな風なのだと言い聞かせた理由は何だろう	○思考過程を示すことで、生徒が問いの立て方を理解できるようにする。 ○問いを分類することで、生徒が着眼点に気づけるようにする。
	イ	2 構成と背景から、物語全体の見通しをもとう（1 時間） ①作品の構成と時代背景を調べて、全体で共有する。 ②時代背景を参考に問いを立てる。	○作品の構成や歴史的背景を提示することで、生徒が物語全体を見通して読めるようにする。
深める	イ	3 人物や関係性の変化に注目して読みを深めよう（1 時間） ①対話ノート「昔のルントウとの違いは？なぜこんなにも変わったのか？」 →その当時の社会が豊かではないからだろうか ②問いノート「描写から登場人物や関係性の変化について問いを立てる」 →時代や社会のせいでルントウは変わったのかな ③話し合いの内容や立てた問いについて全体共有する。	◎対話を「昔のルントウとの違いは？」に設定することで、生徒が前時に学んだ時代背景や構成の理解を手がかりにしながら、学びをつなげ対話できるようにする。
	ウ	4 「私」の内面の変化に注目して読みを深めよう（1 時間） ①対話ノート「私の故郷への気持ちはどこで、どう変わったか？」 →「薄墨色」の描写の時には気持ちは変わっているのかも ②問いノート「語り手に注目して問いを立てる」（1 時間） ③語りの変化から「私」の葛藤について振り返りを記入する。 →船に乗っている時に「名残惜しい気持ちはない」ってあるよ	◎対話を「私の故郷への気持ちはどこで、どう変わったか？」に設定することで、生徒が前時の人物像の変化理解を踏まえて、今度は語り手「私」の視点に注目できるようにする。
	エ	5 仲間との対話から作品の主題に迫ろう（1 時間） ①対話ノート「船に乗っていた私は何を考えていたのだろうか？」 →絶望しているけれど、それでも希望が出てくるね ②問いノート「主題を意識した問いを作る」 →同じ描写が出てきているのはなぜだろう ③「この物語で伝えたかったことは」という視点から振り返りを記入する。 →未来の子供たちへのメッセージだと思う	◎対話を「船に乗っていた私は何を考えていたのだろうか？」に設定することで、生徒が前時までの人物・語り手の変化の理解を土台に、主題を意識した対話へとつなげられるようにする。
見いだす	エ	6 学びを整理して、作品の主題を言語化しよう（2 時間） ①対話ノート・問いノート（振り返る） ②「自分が一番深めたい問い」をテーマに関する考察シートを作成する。 →私は新しい故郷を作るといふ希望を信じて突き進むのだと思う	○これまでに立てた問いや対話内容を振り返らせることで、主題に迫る問いを明確にできるようにする。

Ⅲ 研究の実際と考察

1 第1時：「故郷」冒頭を読み、問いを立てよう（仮説1・手立てアの検証）

単元の導入では、生徒が問いの生成方法を理解できるように教師がデジタル教科書を用いて、「問いは気付きから生まれ、その気付きを本文の表現や描写と結び付けることで問いになる」という過程を可視化した【資料2】。生徒Aは教師のモデルを参考にしながら本文を読み始めた。そこで得た気付きや疑問を問いにするために【資料3】問いノートを活用した。生徒Aの問いノートには【資料4】下線部①「数行の間に『故郷はこんなふう』とネガティブな考えに変わっている」という変化に着目した記述があった。さらに、下線部②では、「美しい故郷」と「もともと」という本文中の語に着目し、それらを対比させながら問いを立てていた。このことから生徒Aは、気付きをもとに本文中の表現に注目しながら問いを考えようとしていたことが分かる。また、下線部③の振り返りには、「注目して問いを立てた」「感じがしたので」「対比に注目して読みたい」と記述されていたことから、自分がどのような気付きから問いを立てたのかを振り返り、問いが生まれるまでの思考過程を自覚している様子がうかがえる。

以上のことから、生徒Aは教師が示した問い生成のモデルを参考にしながら、気付きを起点として本文の表現や描写に注目し、問いを立てることができていたと考えられる。



【資料3】問いノート

学びのポートフォリオ 導入+モデル読解
「問いを立てる」意味を知る

問いノート	振り返り
【気づいたこと】 「美しい故郷」という思い出のままだと受け止めておけばよかったのに、なぜ「もともと」こんなふうだと感じられたのか。 【自分の問い】 「美しい故郷」という思い出のままだと受け止めておけばよかったのに、なぜ「もともと」こんなふうだと感じられたのか。 【本文の事象あり】 そう感じるのは、自分の心象が変わったからか、どう変わったか。 【今の自分の考え】 旅費を減らすことへの思いが強くあるのか。	【振り返りの視点】 ●自分がどんな問いを立てたか ●問いを立てると、どう読みかえたか 【振り返り】 「私」が故郷に帰って来て、そこで「私の故郷はこんなふうだった」という思いが、なぜ「もともと」こんなふうだったのかと受け止めておけばよかったのに、なぜ「もともと」こんなふうだと感じられたのか。この部分から「私」は本当の自分の故郷に対しての思いを無理矢理変えようとしている感じがしたので、思い出と変わってしまった故郷の対比に注目して読みたい。

問いチェックリスト

☒ 登場人物に関する問い	☐ 登場人物に関する問い	☐ 登場人物に関する問い
☐ 登場人物に関する問い	☐ 登場人物に関する問い	☐ 登場人物に関する問い
☐ 登場人物に関する問い	☐ 登場人物に関する問い	☐ 登場人物に関する問い

【資料4】第1時のAの問いノート 記述の抜粋

＜気づいたこと＞

①数行の間に「故郷はこんなふう」とネガティブな考えに変わっている

＜自分の問い＞

②「美しい故郷」という思い出のままだと受け止めておけばよかったのに、なぜ「もともと」こんなふうだと感じられたのか

＜振り返り＞

現在の③故郷に対しての思いに変化があることに注目して問いを立てた。この部分から「私」は本当の自分の故郷に対しての思いを無理矢理変えようとしている感じがしたので、思い出と変わってしまった故郷の対比に注目して読みたい。

2 第3時：人物や関係性の変化に注目して読みを深めよう（仮説1・手立てイの検証）

この時間では、人物の変化に着目させ、対話から社会的背景への視点をつかめるようにするために、「昔のルントウとの違いは何か。なぜこんなにも変わったのか。」をテーマとして対話を行った。生徒は【資料5】対話ノートに自分の考えを記したうえで、グループで登場人物の変化について意見を交流した。当初、生徒Aは【資料6】下線部①のように、ルントウと「私」の関係性が変化した理由を「物理的な距離」に求めていた。ところが、仲間から下線部②の「身分の差」という意見が出されると「身分の差を気にするようになった」という言葉を対話ノートに書き留め、その後の読みの視点として取り入れていた。さらに、問いノートには【資料7】下線部①②のように、「ルントウは私が都市に住んでいる間、私のことをどう思っていたのか。」「再会の場面で言いたいことがあったのに言えなかったのはなぜか。」といった問いが記されていた。これらの問いは、人物の心情だけでなく、その背景にある社

【資料5】対話ノート

テーマ 昔のルントウとの違いは？ なぜこんなにも変わったのか？

自分の考え	仲間の考え
① 昔のルントウは、私と違って、都市に住んでいたから、生活が楽だったのかもしれない。 ② 昔のルントウは、私と違って、都市に住んでいたから、生活が楽だったのかもしれない。	③ 昔のルントウは、私と違って、都市に住んでいたから、生活が楽だったのかもしれない。 ④ 昔のルントウは、私と違って、都市に住んでいたから、生活が楽だったのかもしれない。

考えが変わった（ ） 新たな視点を得た（ ） 問いが生まれた（ ）

【資料6】第3時のAの授業の様子

- ・「①農村と都市っていう物理的な距離のせいで、なんかよそよそしくなったのかな？」と少し悩みながら自分の疑問を述べた。
- ・「②物理的な距離じゃなくて身分の差を気にするようになったから壁ができたのかな。だって、うやうやしい態度になってるし」と友達が返答。

会的な要因へと目を向けたものである。また、振り返りでは下線部③に「身分や経済の格差に敏感になった」と記述していた。このことから、生徒Aは対話の中で仲間の考えにふれることで新たな視点を獲得し、それを問いとして捉え直していたことが分かる。

以上のことから、生徒Aは対話ノートに仲間の考えを記録しながら、自らの考えとの違いに気づき、その気づきを問いノートに新たな問いとして表していたと考えられる。

【資料7】第3時のAの問いノート 記述の抜粋

<自分の問い>

- ・①ルントウは私が都市に住んでいる間、私のことをどう思っていた？
- ・②私がルントウと再会した時、言いたいことがあったのに言えなかったのはなぜか？

<振り返り>

私がルントウと再会した時、厚い壁を感じたのは、農村と都市で暮らす2人の身分の差や子供から大人になって、③**身分や経済の格差により敏感になった**からだと思う。

3 第4時：「私」の内面の変化に注目して読みを深めよう（仮説2・手立てウの検証）

この時間では、人物の心情変化と表現を結び付けて考えることができるように、「私の故郷への気持ちはどこで、どう変わったか」をテーマに対話を行った。生徒Aは当初、【資料8】下線部①「故郷への気持ちが分からない」と仲間に率直につぶやき、解釈の難しさを抱えていた。その中で、仲間から下線部②「ルントウへの気持ちは故郷への気持ちに重なる」という意見を受けると、教科書を開きながら本文中の根拠を探す姿が見られた。さらに生徒Aは、故郷への気持ちを考える中で、下線部③「最初の方と同じ描写の意味」という新たな疑問をつぶやいていた。この描写は、物語の冒頭と終末を結び付ける表現であり、生徒Aは対話を通して、人物の心情だけでなく作品全体の表現にも目を向け始めていたことがうかがえる。その後の問いノートでは、【資料9】下線部①のように「本当に故郷に対する名残惜しさはなくなってしまったのか」と問いを立てていた。そして、下線部②「海辺の広い砂地」や「金色の丸い月」といった描写に注目しながら、下線部③のように「懐かしむ気持ちはまだ残っているのではないか」と記述していた。このことから、生徒Aは対話の中で得た考えを手掛かりに問いを見直し、その問いの答えを求めて本文へ立ち返っていたことが分かる。また、人物の心情を捉える読みから、表現や描写の意味を考える読みへと視点を広げていたこともうかがえる。

【資料8】第4時のAの授業のようす

- ・対話では仲間に「難しい。ルントウの変化に絶望しているのは分かるけど、①故郷への気持ちの変化が分からない」と開口一番につぶやく。
- ・つぶやきに対して「②ルントウへの気持ちは故郷への気持ちに重なるんじゃない？」と聞き、二人で教科書を見ながら、その根拠について意見を交わしていた。
- ・「③ルントウの気持ちと故郷の気持ちが一緒なら、この**最初の方と同じ描写の意味**ってなんか合っていない気がする…」とAは仲間につぶやく。

【資料9】第4時のAの問いノート 記述の抜粋

<自分の問い>

- ・①本当に故郷に対する名残惜しさはなくなってしまったのか？

<今の私の考え>

- ・②「まどろみかけた私の目に**海辺の広い砂地と金色の丸い月**が懸かっている」→故郷の美しさを表す描写？
- ・物語の最初のほうと同じ描写が出てきていることから、私の故郷を③懐かしむ気持ちはまだ残っているのではないかと

4 第5時：仲間との対話から作品の主題に迫ろう（仮説2・手立てウの検証）

この時間では、終末の象徴表現に着目し、作品全体の価値や主題へ近づくために、「船に乗っていた私は何を考えていたのだろうか」をテーマに対話を行った。生徒Aは、自ら「偶像崇拜」を切り口として考えを述べ始めた。そして、【資料10】下線部①の「形がないから…」という仲間の発言を受け、下線部②「私」が「希望」という形のものを大切にしていることに気付いていた。一方で、生徒Aは第4時から着目していた下線部③の「最初と同じ描写」への関心を持ち続けていた。問いノートには【資料11】下線部①「ルントウとの思い出の描写が消えたのはなぜか」という問いが記されており、当初は下線部②のように「忘れたい気持ちがある」と考えていた。しかし、その後の対話では、仲間から下線部③のように、「金色の丸い月」や「紺碧の空」という変わっていない描写に着目した意見が出された。生徒Aはその意見を受け、下線部③「昔のような美しい故郷に戻りたいと思っている」という考えに納得する様子を見せていた。そして、下線部④「変わっていないところを見ることが

【資料10】第5時のAの授業の様子

- ・「偶像ってことは形がないじゃん」「①形がないから…私の考えとか頭で思っていることなのかな」という会話の中でAは「じゃあ、②新しい生活を願ってるって**希望**みたいな、**形がないものを大切に**しているってことでいいよね」と発言し、偶像崇拜の意味を捉えた。
- ・「でも、そうすると、③結局最後の回想場面がよくわからない。故郷への名残惜しさはないのに、**最初と同じ描写**は何だろう」とAは困り感を仲間と共有していた。

で新しい考えが生まれる」と記述していた。

以上のことから、生徒Aは自分の問いに対する考えを一度形成した後も、対話を通して新たな視点を得ることで考えを見直していたことが分かる。第4時では、対話をきっかけに問いを生成し、本文へ立ち返る姿が見られた。第5時では、さらにその問いを基に対話と本文との往還を重ねることで、自分の考えを更新し、読みを深める姿が見られた。

5 第6時：学びを整理して、作品の主題を言語化しよう（仮説2・手立て工の検証）

生徒Aは、これまでの学習の中で「故郷の変化」「身分差」「名残惜しさ」などに関する問いを生成してきた。そこで、生徒Aの今までの学びを整理し、作品の価値や主題に迫るために、対話ノートや問いノートを振り返りながら「一番深めたい問い」を考察する場として、【資料12】考察シートを記入する時間を設けた。生徒Aは今までの学びを「希望」という視点で結び付け、【資料13】下線部①のように「私にとって『希望』とは何か」を自分が一番深めたい問いとして設定した。その問いに対して、生徒Aは下線部②のように、「本当に望むものが手に入るか入らないかに関わらず強く思うことが『希望』だ」と記述していた。ここには、作品を通して捉えた「希望」という概念を、自分なりの言葉で意味付けようとする姿が見られる。さらに、下線部③では「金色の月」や「道」といった描写に注目し、それらを「昔の美しさもある新しい故郷を作るために」「自分の道を貫こうとしている」ことの象徴として読み取っていた。これは、作品中の表現と登場人物の生き方や未来への思いを結び付けながら考察している姿である。また、ルントウや故郷との別れについても、下線部④のように「マイナス」に見える出来事でありながら、「自分の生きていく道を見つける良い機会だった」と捉えていた。この記述から、別れを単なる喪失として捉えるのではなく、未来へ向かう希望や生き方の選択という視点から価値付けようとしていることがうかがえる。

以上のことから、生徒Aは問いノートや対話ノートに蓄積された問いや考えの変容を振り返りながら、自分が深めたい問いを創出し、その問いに対する考えを作品全体の表現や描写を根拠として、作品の価値や主題を自分の言葉で紡ぎ出すことができたと考えられる。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

生徒Aの学びは、【資料14】のように問いを生成する方法を学ぶところから始まり、仲間との対話を通して問いや考えを更新しながら深まっていた。第1時では、教師が示した問い生成のモデルを参考にしながら、本文の表現に着目して問いを立てることができた。しかし、この段階では故郷の変化を「対比」として捉えるにとどまっていた。第3時になると、仲間の「身分差」という視点にふれたことで、人物の関係性を社会的な背景と関連付けて考えるようになった。このことから、生徒Aは対話を通

【資料11】第5時のAの問いノート 記述の抜粋

<自分の問い>

- ・①ルントウとの思い出の描写が消えたのはなぜ？

<振り返り>

- ②ルントウとの思い出を忘れようとしているのではないかと自分の力で本文から考えることができた。Nさんが③「金色の丸い月」や「紺碧の空」と昔と変わっていない描写もある→ルントウはいないけど、昔のような美しい故郷に戻りたいと思っているという考察をしていて、確かにそうだなと納得できた。描写の変化から読み取る時には、変わったところだけでなく、④変わっていないところを見ると新しい考えが生まれると思った。

【資料12】考察シート

問い 「自分が深めたいと思った問い」	
書物にとって「希望」とはどんなもので、これから「希望」とどのように向き合おうとしているのだろうか	
本文の表現 「どの表現・描写が考えをうかづいたか？」	自分の考え 「問いに対する自分の読み・主題価値」
書物は、「相違わずの価値観」とルントウのことを考えていたが、自分のいう「新しい生活」も「希望の価値観」にすぎぬのではないかと自分の持つ希望の正体についている。 「金色の月」という描写は物語の最初のほうにもあったが、すいかの描写がなくなっていることから、ルントウ（美しい故郷の象徴）との別れに出るのを避け、自分は自分の道を歩んでいくとしていることが分かる。	書物が考える「希望」は、これからの未来への期待が込められていると思う。自分とルントウのように遠くを歩き回りながら生活や心が磨かれる生活をしてほしいという願いは「最後無事に手に入るか入らないかに関わらず強く思うことが『希望』だ」と思う。最後の「金色の月」や「それが道になる」という部分から、書物がこれから自分の道（希望）を貫こうとしていることがよく分かる。
まとめ 「この経験を踏んで、今の自分が考えたこと」	
書物は久しぶりに再会して変わり果てた親友の姿を見てショックを受けたが、そこから自分の過去や「希望」について考えていた。ルントウや親友との別れは、書物にとって自分の生きていく道を見つける良い機会だったと思った。	

【資料13】第6時のAの考察シート 記述の抜粋

<自分が深めたいと思った問い>

- ・①私にとって「希望」とはどんなもので、これから「希望」とどのように向き合おうとしているのか。

<自分の考え・感想>

- ②本当に望むものが手に入るか入らないかに関わらず強く思うことが「希望」だと思う。
- ③最後の「金色の月」や「それが道になる」という部分から、昔のような美しさもある新しい故郷を作るために私がこれから自分の道（希望）を貫こうとしていることがよく分かる。
—（中略）—
- ④ルントウや故郷との別れは、マイナスに見えるけど、私にとって自分の生きていく道を見つける良い機会だったと思った。

して新たな視点を獲得し、それを問いとして捉え直していたことが分かる。さらに第4時・第5時では、「最初と同じ描写」に着目し続けながら、対話ノートと問いノートを手掛かりとして本文へ立ち返り、象徴的な描写の意味について考えを深めていった。特に第5時には、仲間の意見を受けて自分の解釈を見直し、「新しい考えが生まれた」と振り返っていた。このことから、対話と本文との往還を通して問いや考えを更新していたことがうかがえる。そして、第6時には、それまでに蓄積した問いや考えを統合し、「私にとって『希望』とは何か」を自分が一番深めたい問いとして設定した。その問いに対して、「本当に望むものが叶うかどうかに関わらず強く願うことが希望である」と自らの言葉で表現しており、作品の価値や主題について自分なりの考えを紡ぎ出していた。

【資料14】生徒Aの主題理解までの変容（問いと振り返り抜粋）		
時間	立てた問い	振り返りや変容の記述
第1時 冒頭を読み、問いを立てる	なぜ「もともとこんなふう」と言い聞かせたのか？	「思い出と変わってしまった故郷を無理に結びつけようとしている。対比に注目して読みたい」
第3時 人物や関係性の変化	ルントウは私をどう思っていたか？再会で言いたかったことがあったのに言えなかったのはなぜか？	「厚い壁を感じたのは身分や経済格差に敏感になったからだ」→仲間の視点から社会的な要因が関係していることに気付く
第4時 「私」の内面の変化	本当に故郷に対する名残惜しさはなくなったのか？	「『海辺の緑の砂地』『金色の月』の描写は懐かしむ心の表れ」→内面の揺れを象徴表現から解釈
第5時 主題への接近	ルントウとの思い出が描写から消えたのはなぜか？	「『金色の月』や『紺碧の空』と昔と変わっていない描写もあると聞いて納得」「新しい考えが生まれた」→象徴表現から主題を深く捉え始める
第6時 主題を言語化	私にとって『希望』とは何か	「本当に望むものが叶うかどうかに関わらず強く願うことが希望」「別れは新しい道を見つけるきっかけ」→主題を自分の言葉で表現

この変容の過程から、以下の成果が確認できる。

① 対話を通して問いを生成することができたこと

- 問い生成の基礎・基本を学んだ上で対話を行うことで、生徒Aは仲間の考えから気付きや疑問を見だし、それらを問いとして表現することができた。

② 対話と問いの往還が読みの深まりにつながったこと

- 対話によって生まれた問いを問いノートに蓄積し、その問いを基に本文へ立ち返る学習を繰り返すことで、生徒Aは問いや考えを更新しながら読みを深めることができた。

③ 学びの過程を統合することで、作品の価値や主題を自らの言葉で紡ぎ出すことができたこと

- 対話ノートと問いノートを振り返りながら学びを整理することで、生徒Aは単元を通して自分が深めたい問いを創出し、その問いに対する考えを作品全体の価値や主題と結び付けて表現することができた。

以上のことから、本研究で位置付けた「対話と問いを往還する学習」は、生徒が対話を通じて、問いや考えを更新しながら読みを深め、最終的に作品の価値を自らの言葉で紡ぎ出す上で有効であったと考える。

2 今後の課題

本実践を通して、生徒Aは対話の中で生まれた気付きや疑問を問いとして捉え、問いや考えを更新しながら読みを深める姿を見せた。しかし、その多くは仲間との対話によって新たな視点を得たことをきっかけとするものであり、自らの気付きから問いを生成し、主体的に追究していく姿までは十分に見取ることができなかった。今後は、日常的な読書活動においても問いを生成する経験を積み重ね、自ら問いを見いだしながら読みを進める力を育成していく必要がある。また、学級全体の振り返りを見ると「意見が広がった」「新しい考えを知ることができた」といった記述は多く見られた一方で、「どのような問いが生まれ、その問いや考えがどのように変容したのか」を具体的に言語化できる生徒は少なかった。対話と問いを往還する学びをより充実させるためには、問いの変容や考えの更新の過程を可視化し、生徒自身が学びの過程を振り返ることができる手立てをさらに工夫していく必要がある。今後は、対話ノートや問いノートの活用方法を改善しながら、生徒が問いの生成から考えの更新、そして作品の価値や主題を自らの言葉で紡ぎ出すまでの学びの過程をより自覚できる授業づくりを目指していきたい。